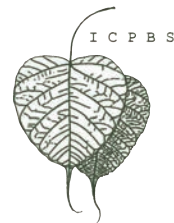




ITOKURA



国際仏教学大学院大学

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「東アジア仏教写本研究拠点の形成」ニュースレター

第6号
2010.12

戦略的研究基盤形成支援事業開始 記念号

特集 東アジア仏教写本研究拠点の形成

「東アジア仏教写本研究拠点の形成」の概要／落合 俊典

『金藏論』をめぐる「縁」

—日本古写本から敦煌写本、韓国版本へ—／本井 牧子

《寺院紹介》

東向観音寺／南 宏信

《調査日記》

フランス国立図書館(リシュリユー旧館)／定源(王招国)

《活動記録》

日本古写経データベースの利用／林寺 正俊



日本古写経研究の課題

昨年度で終了した学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」の事業は多くの方々の御協力のもとに多大な成果を収めることができました。その研究成果を踏まえて今年、本学に新たに日本古写経研究所を設立し、将来にわたる研究の拠点を築きました。

大正新脩大藏経の出版は漢訳仏典の共通テキストを国際的に提供するという大事業でした。極めて困難であったはずのこの出版が可能となったのは、わが国における仏教学の永い歴史を貫いて存在した厳密な文献研究への学問的精神が、仏教界・仏教学界および広範な社会的支持のもとに爆発的に結晶した結果であったことを、あらためて確認することができます。さらに、明治の開国によって海外の仏教研究者との交流が深まったにもかかわらず、欧州は第一次世界大戦という未曾有の大惨禍に見舞われ、世界平和への祈願が頂点に達し、仏教への期待が高まった時期でもあります。その意味で、まさに、時機相応の事業でした。

現在、仏教研究は国際的にも極めて盛んですが、仏典のテキストに関しては新たな時代に入ったと言ったことができます。大正新脩大藏経は高麗大藏経を底本として、三本その他の異読を注記しておりますが、近年の研究では底本よりも異読の方を採用する傾向が顕著になってき

ました。また、多数の刊本大藏経がほぼ全て利用可能となったばかりでなく、中央アジアの写経のほかに、日本の古写経も加えて、これらの比較研究が進められていることはご承知の通りです。

このような現状ですから、共通のテキストとしての新しい校訂本が不可欠です。しかしそのためには、最も重要とみなされている日本の古写経が容易に参照できるようであればなりません。西洋では写本は最高の文化遺産であり、人文学の最終的根拠は写本であると考えられております。西洋の影響が強いインドでは、敦煌写本の発掘が行われていた約百年前に、それと並行するようにして、仏教写本の調査がすでに行われております。日本の古写経の調査研究は喫緊の課題です。

日本の古写経を研究する意義は、狭義の文献研究にとどまるものではなく、広く、脚下照顧という点にあります。本誌「いとくら」が表しておりますように、古写経そのものが文化を総合的に宿しておりますが、その事実が古写経が総合的な文化の中にあることを意味します。仏教についても同じことが言えます。危機的状況に陥っている現代という時代の要請にこたえる仏教研究の一環として、仏典の調査研究が推進されることを期待したいと存じます。今後とも皆様方の御協力を御願い申し上げます。



国際仏教学大学院大学学長 今西 順吉

目 次

日本古写経研究の課題	今西 順吉 (1)
------------	-----------

特集 東アジア仏教写本研究拠点の形成

新プロジェクト始動！

「東アジア仏教写本研究拠点の形成」の概要	落合 俊典 (3)
----------------------	-----------

世界各国に残る諸本より全体像の復元を図る

『金蔵論』をめぐる「縁」 —日本古写本から敦煌写本、韓国版本へ—	本井 牧子 (5)
-------------------------------------	-----------

《寺院紹介》

貴重な資料を残す古刹

東向観音寺	南 宏信 (7)
-------	----------

《調査日記》

千数百年の歴史を生き抜いてきた敦煌写本との出会い！

フランス国立図書館(リシュリユー旧館)	定源(王招国) (8)
---------------------	-------------

《活動記録》

世界に開かれた経蔵の扉

日本古写経データベースの利用	林寺 正俊 (9)
----------------	-----------

公開研究会	(10)
-------	------

今後の予定・既刊書・スタッフ紹介	(11)
------------------	------

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトルとしました。



東アジア仏教写本研究拠点の形成

新プロジェクト始動！

「東アジア仏教写本研究拠点の形成」の概要

落合俊典

日本の仏教文化の起源を考える時、東アジア全域の文化交流を視野に入れなければ全体像が見えません。この地域は、古代から近世に至るまで漢字で書かれた漢語を共通言語として活発な交流が行われてきました。とりわけ大陸から日本への書物伝播には注目すべき事柄が多く見られます。

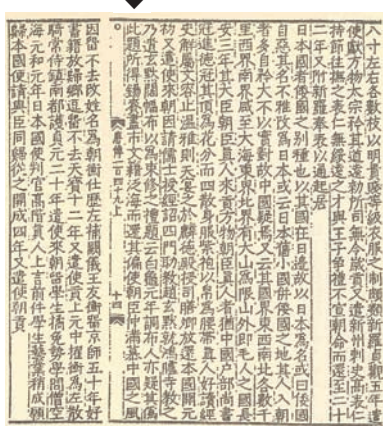
どうやら私たちが想像する以上に唐の長安や洛陽から日本へもたらされた漢籍や仏典の総数は大量のようでした。

漢籍に関する重要な記録は二つあります。

一つは、『旧唐書』倭国日本伝に記されたものです。日本から来た使人が長安にあった書物を大量に購入求めたと書かれています〔写真1〕^①。この人物は誰でしょう。太田晶二郎氏に依れば吉備真備であつたと言います。これはまさしく倭国が書物を通じて唐の文化を摂取しようとした決意と実行力の高さを示すものに違いありません。

二つは、名古屋の大須観音の南側にある七寺という古刹に伝わった写本に見られる記述です。何と仏典の総巻数を一万二千三百

巻とする一方、漢籍を三万九千巻としています〔写真2〕^②。恐らく中央官庁に関係ある施設の蔵書総数でありましょう。この記録は俄には信じがたいのですが、仏典総巻数は私の計算では十分根拠のある数字です。問題は漢籍の数字ですが、これも決して出鱈目な数字とは思えません。ちなみに吉備真備が遣唐使として渡った百年以上の前の隋代では、漢籍の総数を調べるとその巻数は四万数千巻となります^③。唐代の記録書である『旧唐書』や『新唐書』を見ますとそれが五万、六万と増加していますが、要は当時その巻数が公的

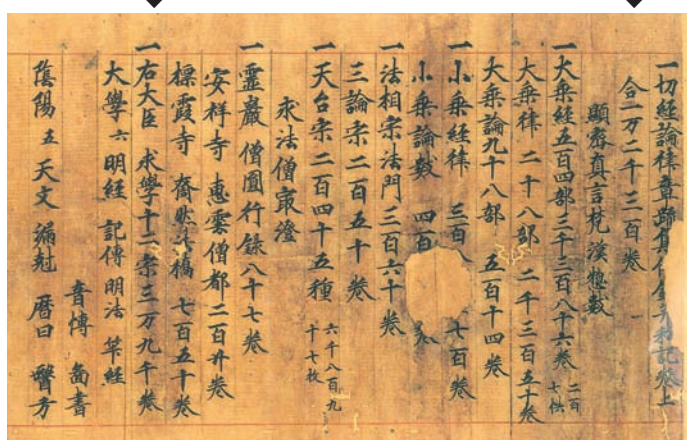


〔写真1〕『旧唐書』倭国日本伝(岩波文庫本影印(130～131頁)より)

な全体像であつたということでありま。ちなみに日本の漢籍に関する記録であります『日本国現在書目録』には一万七千巻ほどが列挙されています^④。これは散逸した漢籍を目録化することで何とか復元しようとした結果でありますから、少なくともこの巻数以上の漢籍が存していたことは間違いないのです。

以上のような記録を信じるとすれば日本には大量の写本(書物、内典の仏典と外典の漢籍)が伝来していたことは間違いないでしょう。当時の困難な海上交通を考えると、日本人がいかに力を尽くしたかが推し量られて遣唐使に関わった人々の労苦が偲ばれます。

吉備真備に同行した玄昉は『開元録』に基づく一切経五千余巻を持ち帰ったと伝えられています^⑤。そこで日本は国を挙げて、唐から請求された神々しい經典を鏡鑑として大々的な一切経書写事業を推進し、多くの日本製写経が全国各地に広まりました。今日ではそれらを奈良写経と称していますが、実はその後の写経事業で使われた底本の大半がこの奈良写経か、もしくはその転写本であつたのであります。貴族や地方の有力者の支援による書写事業によって多くの経巻が書写されました。これに用いられた和紙



〔写真2〕七寺蔵『一切経論律章疏集(伝録)并私記卷上』巻首(七寺古逸經典研究叢書)第六巻口絵より)

一方、一切経以外の章疏集伝記などの仏教写本はどうなっているでしょうか。平安時代後期の諸記録に基づきますと、これらの総巻数は筆者の試算に依れば約七千巻に達します。こちらは主に東アジアの学問寺院における研究が結実したものでして、所蔵していた寺院は限られていました。一切経の書写事業を推進した全国各地の寺院も、この学問的な仏典まで書写する必要性を認めることは少なく、またそれを認めても経済力が許さなかったようです。

それでは、これらの仏教学研究の精華が見られる約七千巻の仏教写本は現在どうなっているのでしょうか。明確な数字を示すことは難しいのですが、恐らく三分の一も残っていないでしょう。大変残念なことです。しかし、そうであるからこそ現在残っている仏教写本をきちんと調査し、データベース化し、研究資料として広く世界に公開する必要があるのではないのでしょうか。

仏教の展開は様々な宗教活動に依りますが、經典などの伝播は、一切経の写経事業によつて大きく展開します。その形態も、一字一字丁寧に書いていく写経から木版による大量生産の時代に移行していきます。これは中国の北宋時代に始まりました。十世紀の後半です。このようにして最初の刊本大蔵経が刊行されましたが、十三世紀になると種々な刊本が出てきました。それらが盛んに日本に輸入されるようになります。その陰で日本古写経は使用頻度が低下し、資料的価値も無くなったと思われていきました。近代になると活字本が出ます。そして現代では、従来の研究の大半は刊本や活字本を

中心とした研究に依存してきました。しかし、二十世紀初頭に敦煌写本が発見されてからは、欧米や中国では、写本を基にした文献研究が徐々に浸透し、今やほとんど主流となっています。ところが日本においては、古写経や古写本が多く存在しながら、依然として刊本や活字本を中心にした研究が主体であるように見受けられます。

このような現状に鑑みて、本プロジェクトでは、豊富な日本古写経の集成を一層図るとともに、さらに全国各地に所蔵されている仏教写本の集成を企図し、その上で写本を基にした仏教文献研究の一大拠点となるべく研究事業を推進していきます。もとより写本だけが最高最善ではありません。古典籍は、諸本を比較研究しその原意を読み取るとともに長い年月に少しずつ変相していった解釈や本文を細密に検証していく作業が大事です。

仏教写本について、今一例を挙げてみましょう。中国南北朝時代までの仏教教学を集大成した重要典籍、浄影寺慧遠(五二三―五九二)が撰述したと言われている『大乘義章』二十巻があります。『大正蔵』四十四巻に収載されていますが、その底本は江戸時代版本^⑧です。ところが、大阪府河内長野市の天野山金剛寺にある院政期写本^⑨(写真3)を見ますとその編成が大きく異なるばかりでなく、逸文も含まれていることが分かります。これは江戸時代に版本として上梓する際に大幅な改訂を行ったことが原因と考えられますが、問題は敦煌などに目が向いて、日本の古写本に基づく原文研究や諸本研究をしてこなかったことにあります。

このように日本に残る仏教写本を再調査して、文献学的研究を本格化することは、敦煌学が隆盛となつていく東アジア仏教研究に大きな寄与をするばかりでなく、仏教写本を基にした新たな校訂本作成の拠点とすることが出来ます。古代中世の仏教写本は東アジア仏教世界の共通言語の漢語・漢文で書かれています。日本の仏教写本が、東アジア世界で、思索研究されてきた深遠な言語空間を解明する一助になるに違いありません。いえ、大きな寄与をなすことは疑いないと思います。表現を変えますならば、仏教学だけに限定されない新たな人文・古典学の出発点となると言っても過言ではないでしょう。このような観点から新たな研究拠点を設置し、継続的に研究を推進することは今日特に求められる重要課題でありましょう。関係諸機関の寛大なご支援を期待しますとともに、仏教研究者からの暖かいご理解を願つてやみません。

【註】
(1) 岩波文庫本『旧唐書倭国日本伝』(石原道博編訳)によれば、「得たところの錫資^{しやくし}(た



【写真3】金剛寺蔵院政期写『大乗義章』第十六巻頭

まもの)、ことごとく文籍をかい、海上を通つて還つた。」とあります。

(2) 太田晶二郎『吉備真備の漢籍将来』(太田晶二郎著作集)第一巻、吉川弘文館、平成三年。

(3) 『一切経論律章疏集(伝録)并私記巻上』(『七寺古逸經典研究叢書』第六巻、大東出版社、一九九八年)。

(4) 九世紀以降の基準となる一切経の総巻数は『貞元録』に依る五三五一巻ですが、別生経や不入蔵經典を加えると六千巻前後になったと思われます。これに章疏集伝記等の六千数百巻を加えるとほぼ一万二千三百巻になります。

(5) 『隋書』經籍志の末に「大凡経伝存亡及道仏、六千五百二十部、五万六千八百八十一巻」とあります。ここから道仏経の七千四百十四巻を引くと四万九千四百六十七巻となります。この数字は隋代に散逸した書も含まれておりますので当時存した漢籍の総数は四万巻前後となるでしょう。

(6) 『日本国現在書目録』は藤原佐世によつて十世紀に編纂されました。

(7) 『続日本記』巻第十六「聖武天皇天平十八年六月」。

(8) 延宝二年刊(一六七四年)。大谷大学図書館蔵、本学蔵、その他蔵。

(9) 金剛寺蔵『大乗義章』(金剛寺聖教二二一四)。現存数は全二十巻の内十四巻です。なおこの他に『大乗義章義目』一卷(金剛寺聖教一七四八八)があります。

(本学教授)

『金蔵論』をめぐる「縁」

——日本古写本から敦煌写本、韓国版本へ——

本井牧子

大正十一年（一九二二）、興福寺東金堂天井裏の塵埃の中から、『日本靈異記』の古写本が発見された。現在では国宝に指定されているこの『靈異記』古写本の出現の裏に、もうひとつ別の資料の出現劇があったことはあまり知られていない。このとき、時を同じくして出現したのが、本稿で取り上げる『金蔵論』である。

『金蔵論』は、中国北朝末期に釈道紀という人物によって編まれた書である。これが『靈異記』の背面に書写されていたのである（正確には『靈異記』が紙背）。この二書が表裏に写されていたのは単なる偶然とは考えがたい。

周知のとおり、『靈異記』には善因善果、悪因悪果といった因果応報を語る説話が多くおさめられているが、この『金蔵論』もまた、さまざまな仏典から抄出された善惡の因縁譚を中心に編まれたものだからである。そこには『靈異記』と『金蔵論』を結ぶ「縁」が存在したはずである。

さて、近年、この『金蔵論』研究は、奇しき「縁」に導かれるかのように劇的な展開をみせている。本稿では、東アジア仏教写本研究の一事例として、筆者が『金蔵論』にかかわることとなった平成十三年（二〇〇一）以降の『金蔵論』研究進展の経緯を紹介したい。少々裏話めいた形となってしまうことをおゆるしいただきたい。

平成十三年、筆者の参加する牧田諦亮先生主催の研究会では、あらたな研究対象として『金蔵論』を輪読すること

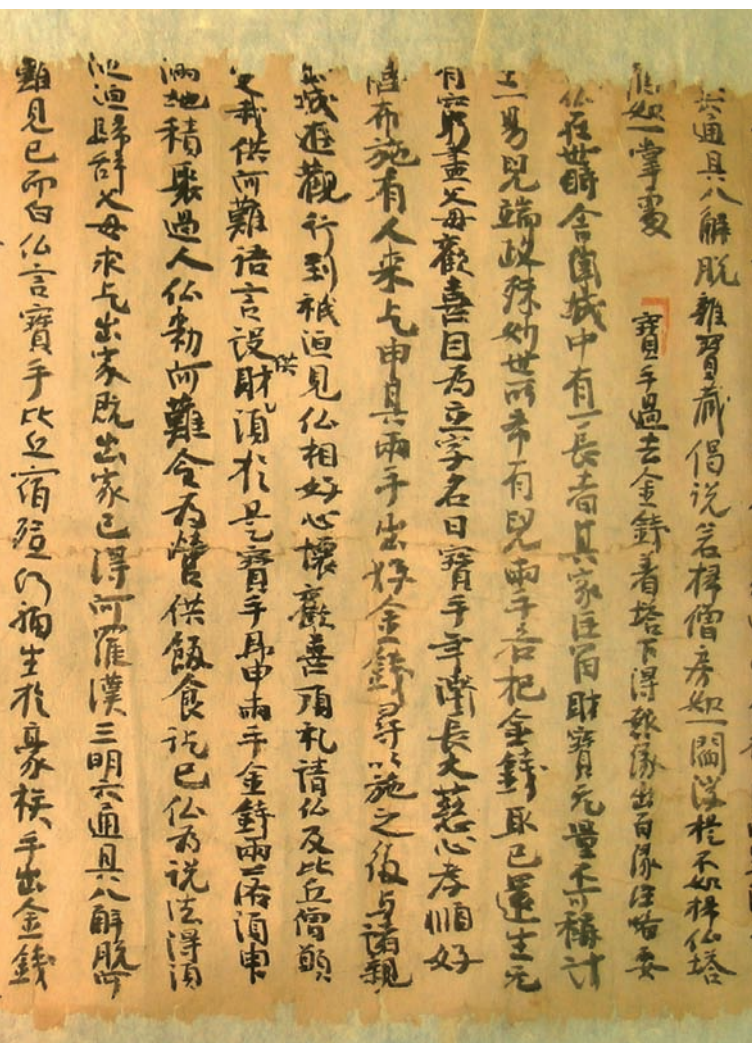
を決めた。この時点で知られていた『金蔵論』写本は、全七卷（あるいは九卷）のうち、先述の興福寺本巻六

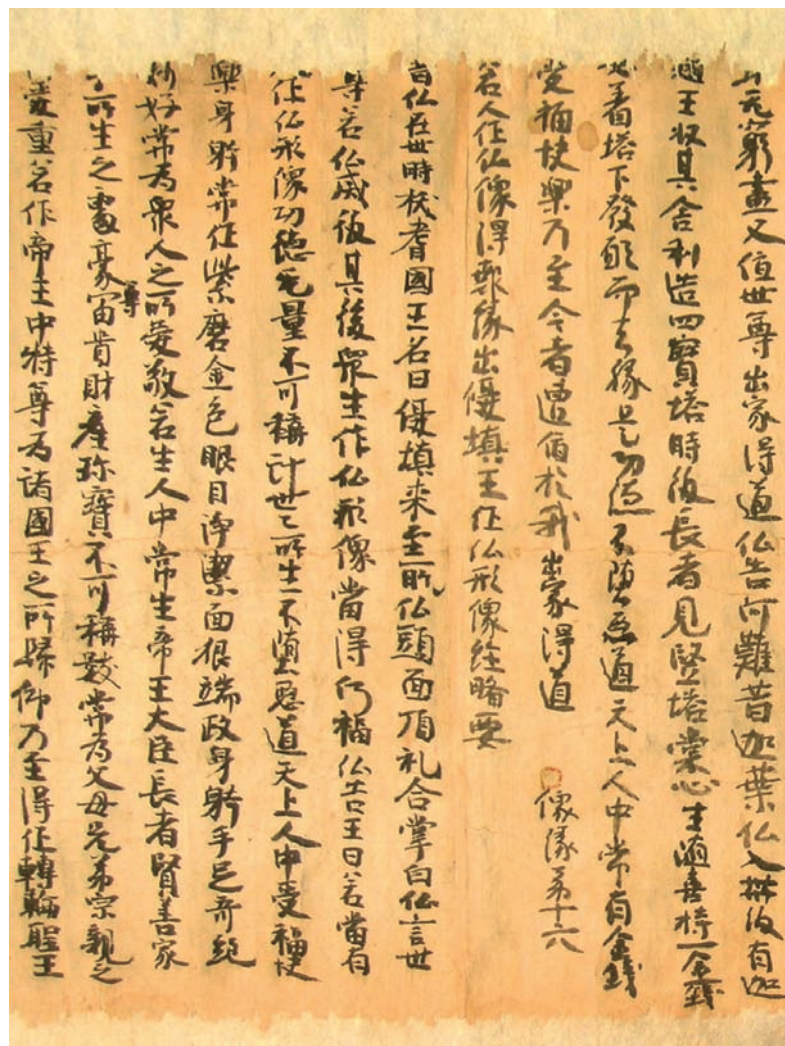
と大谷大学博物館蔵法隆寺旧蔵本（谷大本）巻一、二のみであった。この『金蔵論』日本古写本を対象とする研究会は、その後平成十七年から宮井里佳氏を代表者とする科学研究費補助金基盤研究（C）「中国北朝後半期の仏教の類書『金蔵論』の研究」へと発展する。ところが、日本古写本の三巻だけでは、断片的にしか『金蔵論』の姿をうかがうことができない。しかも、三巻のうち谷大本の巻二は他の巻と形式や内容が異なり、それが全体像の把握を妨げていた。『金蔵論』研究は停滞を余儀なくされていたのである。

この隘路を切り開いたのが、研究会のメンバーである齊藤隆信氏のご教示くださった一本の論文であった。それは荒見泰史氏が中国で発表された論文であったが、そこには敦煌写本の中から『金蔵論』が発見されたことが報告されていたのである。この荒見氏の貴重なご指摘は、数点のあらたな『金蔵論』敦煌本出現への「縁」となった。さらに、その敦煌本調査のために訪問していた大英図書館で、たまたま同じ時期に調査中であつた方廣錫氏に別の『金蔵論』敦煌本をご教示いただくなど、つぎつぎと『金蔵論』をめぐる「縁」が結ばれていったのである。現時点で確認されている『金蔵論』敦煌写本は八点四本にのぼる。

敦煌本の出現により、日本の古写本に欠けていた巻五の内容がほぼ明らかになると同時に、『金蔵論』が「縁」という章をたててテーマ毎に説話を類従するという構成になっていることもはつきりと浮かび上がってきた。一方でこのことは、この形式をもたない谷大本巻二の異質性を際立たせる結果となつたが、この時点では、谷大本巻二が竄入であることを推測することしかできなかった。

驚くべきことに、この推測を裏付ける資料が出現する。平成二十一年春、落合俊典氏、林寺正俊氏、上杉智英氏は、本プロジェクトの前身である学術フロンティアの調査の





『金藏論』敦煌写本（中国国家図書館蔵・BD3868）

のである。

ため韓国釜山の古刹、梵魚寺を訪問中に、聖寶博物館に陳列されていた『金藏論』版本を発見したのである。この梵魚寺本は谷大本と同じ巻一と巻二の合冊でありながら、巻二の内容が谷大本とは全く異なるものであった。果たしてそれは「縁」という章をもつ、他の巻と共通する形式のものであり、こちらが本来の『金藏論』本文であることはやはり疑いがなかった。さらに、梵魚寺本の巻頭には章の目録が付されており、散逸部分も含め、『金藏論』全体の構成が判明するなど、梵魚寺本の出現は『金藏論』という書物を考える上で、きわめて大きな意義をもつものとなった。

その後、学術フロンティアでは、藤本幸夫氏を講師に招き、朝鮮版本に関する知見を得るなど、梵魚寺本の調査のための準備を進めていた。そのようななかで、今度は佐藤厚氏より、韓国で刊行された崔鉉植氏による『金藏論』に関

する論文が提供された（後に藤本氏からもご教示いただいた）。この論文により、梵魚寺本出現に先立つて南権熙氏が梵魚寺本と同版とみられる版本の断簡を発見されていたことも明らかになった。『金藏論』関連の資料や研究が「縁」によつてつぎつぎとたぐりよせられてきた

ここまで専ら筆者の視点から時間を追って経緯を述べてきたので、いろいろなことが段階的に明らかになってきたかのように見えるが、それは情報もたらされるまでにタイムラグが生じているためである。あらためてながめてみると、われわれが日本古写本の輪読をはじめたのが平成十三年（二〇〇一）、荒見氏が敦煌写本に関する論文を発表されたのが二〇〇三年、南氏が韓国版本の断簡について報告されたのが二〇〇二年と、三つの研究が、ほぼ同時期に、しかし全く接点をもたずに進められていたことがわかる。

中国北朝末期に編まれた『金藏論』は、敦煌、韓国、日本にその姿を留めていた。現物を確認することはできなかったが、トルファンにも伝わった痕跡があるという。東アジアに広く流布した『金藏論』が、今度は東アジア各地で研究

対象となり、ここへきてようやく、それらの研究の「縁」が結ばれ、学術交流が行われるという段階に入ってきた。平成十九年の日台共同ワークショップ「佛教文献と文学」（学術フロンティア・京都大学人文科学研究所21世紀COE・台湾南華大学共催）や、平成二十二年の韓国金剛大学校仏教文化研究所主催のセミナー「東アジア古代仏教写本研究の現況」などで、『金藏論』がテーマのひとつに設定され、活発な議論が展開されたのも、そのあらわれのひとつである。

本年度は、『金藏論』に関連する書籍が、中国、韓国、日本でそれぞれ出版される。荒見氏『中国講唱文学研究』（中華書局）は敦煌本の翻刻と研究論文を収める。韓国では梵魚寺本の影印が崔氏の解題を付して刊行された（『梵魚寺所蔵国家指定（宝物）典籍影印本 金藏要集經』文化財庁・金井区庁）。宮井氏と筆者とは、日本古写本の影印をはじめとする本文資料に研究篇を付して公刊する予定である。

『金藏論』をめぐる「縁」は、東アジアを舞台としてさらなる広がりをみせることであろう。そして、『金藏論』研究を前進させてきた奇しき「縁」とともに、その「縁」を引きよせる求心力として機能する研究拠点の存在があることも、最後に付言しておきたい。

【執筆紹介】

本井 牧子（もとゐ まきこ）

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、大谷大学任期制助手を経て、現在は筑波大学人文社会科学部研究科助教。専門は国文学。仏典にみられる説話および文学におけるその影響・展開について研究。

東向観音寺

貴重な資料を残す古刹

朝日寺と北野天満宮

朝日山あさひさん東向観音寺は京都市上京区に在り、現在真言宗泉涌寺派準別格本山です。寺伝によると延暦二十五年（八〇六）に桓武天皇の勅を奉じて藤原小黒おぐろまろ（七三三〜九四）らが皇城鎮護のために建立したのが起源であり、当初は朝日寺と呼ばれたらしく、現在の山号にその名残が見られます。延喜三年（九〇三）、大宰府に左遷されていた菅原道真が歿し、その後都では落雷等の災害が相次ぎ道真の祟りであると恐れられました。この祟りを鎮めるため天暦元年（九四七）朝日寺の僧最鎮（生没不明）らが、北野の地に道真を祀る社殿を造営したのが北野天満宮の始まりとされます。応和元年（九六一）、朝日寺は筑紫の観世音寺より菅原道真作の十一面観世音菩薩を請来し安置したのが、後に観音寺と称される起源となりました。

応長元年（一一三一）、浄土教を中心

に諸宗を兼学した律家の無人如導（一二八五〜一三五七）が東向観音寺を始め悲田院等十五箇所にのぼる寺院を再興・造営しました。筑紫の観世音寺に擬して観世音寺または観音寺と改称し、天満宮御本地仏や北野神宮寺、または奥之院とも称しました。また本堂が東を向くことから東向観音と称されるようになります。元は、東向・西向の両堂あったのですが、応仁の乱や火災等で焼失し、西向は再興されないまま東向観音堂のみ再建されました。現在、洛陽三十三所観音巡礼の三十一番札所でもあります。

五月一日経

本堂は京都市指定有形文化財に指定されており、他にも『崇光天皇宸翰』や『無人如導宗師書状』等、古文書類を多く所蔵しています。經典章疏類で最も注目できるのは、光明皇后が亡き父母の為に発願・書写させた一切経の一卷、『諸法無行経』巻下です。この一切経の巻尾に「天平十二年（七四〇）五月一日」付けの願文があるところから、「五月一日経」と称されていることは夙に有名です。

良忠撰『往生要集鈔』

その他には浄土宗鎮西派第三祖良忠



東向観音寺山門

内容・分量共にまず抛り所となるべき代表作です。東向観音寺にはその現存最古である正和三年（一一三二）（書写本（八巻中三巻が現存））が伝わっています。書写者は如導。書籍の形態は粘葉装でんようそうと言われるもので、主に平安時代院政期から鎌倉時代に見られ、奥書の書写年代とも符合します。本書は後代に増広されますが、原初形態を探る上でも一級の資料です。また『往生要集鈔』と同木箱に蔵される良忠の『浄土宗要集』巻第二も同じく良忠著作であり、成立過程を見る上で重要な書物であります。

以上、所蔵資料を俯瞰してみると律宗のみに拘る事なく、浄土教を修学する如導の学問意識が見えてきます。

【参考文献】

- ・東向観音寺史料調査団「東向観音寺史料目録（一）」（『東京大学日本史学研究室紀要』九、二〇〇五年、連稿）
- ・大塚紀弘「中世都市京都の律家」（『寺院史研究』一〇、二〇〇六年）
- ・南宏信「東向観音寺蔵良忠撰『往生要集鈔』について」（『印度學佛教学研究』五八―二、二〇一〇年）

（南宏信）

フランス国立図書館 (リシュリユー旧館)

千数百年の歴史を生き抜いてきた
敦煌写本との出会い！

今年(二〇一〇)六月、私はペリオ本『御注金剛般若経宣演』及びその関連文献を調査するために、初めてパリを訪れました。成田空港午前十時半発のエルフランスの直行便に乗り、パリ郊外のシャルルド・ゴール空港に到着したのは、

当日現地時間の午後四時半頃でした。事前に予約した宿泊場所は、大学都市(シテ・ユニベルシテール)のモンソーリ公園の近辺にあります。日本からは一人で旅立ちましたが、翌日から調査では本学の落合俊典教授やその他の先生方と合流しました。

ペリオコレクションとは、フランスの東洋学者ポール・ペリオ(一八七八―一九四五)によって敦煌で蒐集された文献群です。現在、パリ市内の中央、パレ・ロワイヤルの北側に位置する国立図

書館リシュリユー旧館が所蔵しています。

朝、RER(高速郊外鉄道)の大学都市駅からB3線に乗り、シャトレ・レアル駅で下車、そこからは徒歩で、フランス銀行前を通過し、図書館に到着します。宿泊場所からは三十分ほどかかりました。門に入る際に、安全面の配慮から、必ずカバン内の荷物をチェックされます。初めて訪れた場合は、閲覧室に入る前に、利用者登録の手続きが必須です。色々質問された後、その場で顔写真撮影、そして写真付きの閲覧カードが出来上がります。



フランス国立図書館(リシュリユー旧館)外観

館内では、調査用のノートなど以外の所持は禁止となります。また、調査の日数によって、一定の閲覧料金が徴収されます。この点は、無料閲覧できるロンドンの大英図書館と異なっています。原則として、予め調査を希望する資料のリストを図書館に提出しなければなりません。そうでなければ閲覧拒否の場合もあります。

リシュリユー旧館は現在改修工事中で、敦煌写本の閲覧室は、地階に移設されています。二十人ぐらいの閲覧席が配置されていますが、少々狭く感じます。入口でまず係員に閲覧カードを提示すると、確認後に座席番号札をもらえます。指定座席に移動してから、閲覧希望の文献の番号をカードに記入して提出すれば、三十分以内にテーブルまで写本を運んでくれます。そこで、ようやく調査作業が始まるわけです。開室時間は午前十時から午後五時までですが、調査は四時半までです。調査を終える三十分前には文書を返還しなければなりません。閲覧室の周囲には敦煌文献の図録及びそれに関連する資料が並べられており、日本語の研究書・辞典・目録・索引などの図書も少なからず収納され、極めて便利な空間です。

調査の所期の目的を果たし、調査時間

が終わるまでの間に、京都国立博物館の赤尾栄慶先生と共にペリオ四五〇六号の『金光明経』を拝見することができました。この写本は皇興五年(四七二)の奥書を持ち、北魏の書風溢れる長卷子の絹本で、ペリオコレクション中でも白眉というべきものでしょう。千五百年前の仏教遺品を目の当たりにした、その感動と感激の気持ちは、言葉で言い表すことはできません。

最終日の調査終了後、図書館の近くにあるルーブル美術館に立ち寄りました。当日は金曜だったので、開館は夜十時までです。見学し終わって、夜八時を過ぎても、太陽は沈む気配もありません。六月のパリ、昼間の時間は長いですが、三日間の調査はあつという間に過ぎていきました。

近年、世界中に散存している敦煌写本は、図録あるいは国際敦煌プロジェクト(IDP)のホームページで次々と公開され、そのほとんどの内容が知られるようになりました。しかし、それだけでは写本の紙質・色・形態などを知りえようとしても困難な面もあります。文献研究にとつて現地で実際に原物を手にするのは最も大事なことで、今回の調査によって改めて実感しました。

(定源(王招国))

活動記録

世界に開かれた経蔵の扉

日本古写経データベースの利用

林寺正俊

データベースの枠組み

本年より本学のホームページ上で公開されている日本古写経データベース(アドレスは <http://koshakyodatabase.ics.ac.jp/index.seam>)は、經典名、經典番号によって目的の經典を検索し、データベース内にその古写経のデジタル画像が登録されている場合にはその画像を表示するシステムである。經典の配列順・名称・調巻など当データベースの基本的枠組みは『貞元入蔵録』(西紀800年撰)に拠っているため、諸經典は大乗の經・律・論、小乗の經・律・論、賢聖集という分類に従って配列されている。そのため、初期画面では「大般若波羅蜜多經」(大乗・經)から順に始まっている(写真1)。ただし、「並び順の変更ボタン」をクリックすれば、今日一般に用いられている『大正新脩大藏經』の配列順、つまり第一卷阿含部の「長阿含經」から始まる順に並び変えることも可能である。

当データベースの使い方については、ここで一々説明するよりも、むしろ実際にインターネットで前記のアドレスにアクセスし、何らかの經典を検索したり、画像を表示したりして、試しに使っていただくのが一番よいであろう。ただ、インターネット上で閲覧できる画像は経巻冒頭の1カット分のみとなっている。それは、古写経を所蔵する寺院の所有権や画像ファイルのセキュリティ上の都合があるためである。

全画像の閲覧

では、經典全体の画像を見るにはどうしたらよいのか。經典の全画像(PDF化された画像ファイル)については本学附属図書館内においてのみ閲覧できるようになっているため、大変お手数ではあるのだが、直接図書館にお越しになって閲覧専用パソコンでご覧いただくしか方法はない。



〔写真1〕日本古写経データベース初期画面



〔写真2〕両面ディスプレイで写本の比較が容易に。

以下には、①その手続き、②閲覧、③複写について簡単に述べよう。

①手続き 利用希望者は希望日時を本学附属図書館に連絡し、当日持参すべき書類(身分・職分によって異なる)や注意事項についてあらかじめ確認する必要があります。図書館の連絡先は以下の通り。

電話 03-5981-5277
FAX 03-5981-5284
Email: licabs@icabs.ac.jp

②閲覧 利用に先立って図書館の窓口で必要書類および利用申込書を提出する。当データベースの閲覧専用パソコンは両面ディスプレイとなっているため、複数の古写経の画像を同時に表示させたり、片方の画面に文字テキストを表示させて写本と比較したりすることができ(写真2)。



〔写真3〕背面の棚には『大正藏』や『中華大藏經』が並ぶ。

また、閲覧用パソコンの近くには『大正新脩大藏經』をはじめ『中華大藏經』『磧砂大藏經』『房山石經』などの各種大藏經が配架されており(写真3)、必要に応じて各種テキストをその場で取り出してすぐに閲覧できるようになっている。

③複写 画像ファイルの複製ならびにデジカメによる画面の撮影は認められないが、紙媒体の複写は可能である。代金は1枚につき、カラー200円、モノクロ100円である。コピー代としては高いと思われるかもしれないが、実はこの代金の一部は寺院に納められるものである。古写経は、洞窟や砂に埋もれてたまたま運良く残った写本とは異なり、先人達のたゆまぬ努力と管理のおかげで今日まで伝えられてきた貴重な文化遺産である。「無料で公

開すべきだ」という意見もあろうが、ただ、われわれは古写経を伝えてきた寺院に対して、充分ではないにせよ、何らかの明瞭な形をもって敬意をはらう必要があると考えている。コピー代金はこのような考えのもとに設定されていることをご理解いただければ幸いである。

(日本古写経研究所非常勤研究員)

公開研究会

今年度第1回公開研究会について報告する。詳細は以下の通りである。

○平成22年度第1回公開研究会

平成22年5月22日(土)

午後3時～4時半

於 国際仏教学大学院大学

橋本貴朗(國學院大學助教)

「『金光明最勝王經』巻第九の文字―

異体字を中心として―」

宮井里佳(埼玉工業大学准教授)

「アジアで読まれた『金藏論』―敦煌写

本・日本古写本・高麗版本を通して―」

橋本氏は、愛知県新城市の臨済宗方広寺派の寺院、徳運寺に収められている平安末期写経の中から、安元元年(1175)の奥書を有する本『金光明最勝王經』巻第九に着目し、異体字を中心に文字の諸相について考察された。敦煌写本中の同巻との文字の比較では、一卷約一万字に及ぶ文字を一字ずつ切り取り、異体字字典



第1回公開研究会の様子。新校舎の春日講堂で行われた。

のように並べられた様子は圧巻であった。

宮井氏は、中国北朝末期(6世紀後半)

に道紀によって編纂された仏教の要文集である『金藏論』について、日本古写本・敦煌写本に加え、韓国に現存する高麗後期の梵魚寺藏版本を分析し、『金藏論』の構造や内容について考察された。

【補足】

本学学術フロンティアの昨年度第3回公開研究会、及び公開シンポジウムについて、簡単に報告しておく。

○平成21年度第3回公開研究会

平成21年11月14日(土)午後3時～5時

於 国際仏教学大学院大学

廣坂直子(京都外国語大学非常勤講師)

「国際仏教学大学院大学本『摩訶止観

巻第一の訓点について

生駒哲郎(東京大学史料編纂所図書部史料情報管理チーム・山脇学園短期大学非常勤講師)

「松尾社一切経の書写―平安時代後期の写本一切経の書写について―」

石上和敬(武蔵野大学准教授)

「Karunapundarika(悲華經)の漢訳資料について」

これまで同様多数の参加者があり、盛況のうちに学術フロンティア最後の公開研究会は終了した。

○平成21年度公開シンポジウム

テーマ

「仏教研究における日本古写経の意義

―デジタル化の完成に向けて―」

平成21年12月5日(土)

午後1時半～5時半

於 国際仏教学大学院大学

今西順吉(国際仏教学大学院大学教授・学長)

「『中論』成立の背景」

落合俊典(国際仏教学大学院大学教授)

「日本古写経データベースと漢訳仏典研究」

林寺正俊(国際仏教学大学院大学学術フ

ロンティア研究員)

「日本古写経の系統分析―『中阿含經』

を例として―」

杉本一樹(正倉院事務所長)

「正倉院事務所による聖語藏経巻デジタル化事業について」

ジャン・ノエル・ロベール

(フランス高等研究院教授/国際仏教学大学院大学客員教授)

「『正法華經』『信樂品』から見た竺法護の翻訳の方法」

日本古写経のデジタル化の議論を中心に、その研究も含めて、5名から有意義な発表があり、その後、活発な議論がなされた。参加者は約100名、大変盛会の中に終わることができた。

学術フロンティアの全イベントは、これをもって終了。5年間の実績は、現プロジェクトの礎となり、更に研究が続いていくのである。

大学移転のお知らせ

本年3月に、本学は港区より文京区へ移転しましたのでお知らせいたします。詳しい住所は裏表紙をご覧ください。

上記の写真にありますように、今後の公開研究会などは基本的に春日講堂で行われます。新しい校舎の新しい講堂で最新の研究成果の発表を行って参りますので、ぜひご参加くださいますようお願い申し上げます。



今後の予定

平成23年度の予定は以下の通りです。

◇公開研究会◇

5月と11月に、国際仏教学大学院大学にて開催予定です。

既刊書

○『いづく』1～5号(非売品)

本書は本学学術フロンティアのホームページ上でダウンロードできます。バックナンバーを希望される方は下記連絡先にお知らせ下さい。

○『日本古写経善本叢刊(非売品)』

第1輯『玄應撰一切経音義二十五卷』

第2輯『大乘起信論』

第3輯『金剛寺藏 観無量壽経 無量壽経優婆塞舍願生偈註卷下』

第4輯『集諸経禮懺儀卷下』

○『日本現存八種一切経対照目録』(非売品)

本書は本学学術フロンティアのホームページ上でダウンロードできます。

○『佛教文獻と文學 日臺共同ワーク ショップの記録 2007』(非売品)

○『愛知縣新城市徳運寺古寫經調査報告書 徳運寺の古寫經』(非売品)

○『古写経研究の最前線—シンポジウム講演資料集成—』(非売品)



スタッフ紹介

研究代表者

落合俊典(本学教授)

研究分担者

アレックスフロリン(本学教授)

松村淳子(本学教授)

藤井教公(北海道大学教授)

赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部副部长 (上席研究員))

高田時雄(京都大学人文科学研究所教授)

金水 敏(大阪大学教授)

本井牧子(筑波大学助教)

林寺正俊(本学附置日本古写経研究所非常勤研究員)

三宅徹誠(同・非常勤研究員)

学内研究協力者

今西順吉(本学教授・学長)

Hubert DURT(本学教授)

津田眞一(本学教授)

木村清孝(本学特任教授)

末木康弘(本学附属図書館副館長)

齊藤達也(本学附属図書館員)

堀伸一郎(本学附置国際仏教学研究所副所長)

赤塚祐道(本学研究生)

楊 婷婷(本学院生)

蕭 文真(本学特別研究生)

その他、学外研究協力者多数。

プロジェクト研究員(PD)

上杉智英・南 宏信

プロジェクト研究補助員(RA)

定源(王招国)

(平成22年12月現在)

CONTENTS

Junkichi IMANISHI, The Purposes of the Studies of the Old Japanese Manuscripts	1
Toshinori OCHIAI, On the Research Project 'Establishment of the Research Centre for East Asian Buddhist Manuscripts'	3
Makiko MOTOI, The Fragments of the <i>Jinzanglun</i> Extant in Japan, Dunhuang, and Korea	5
Hironobu MINAMI, A Short Introduction of the Higashimuki-Kannonji Temple	7
DINGYUAN (Zhaoguo WANG), Report on the Firsthand Investigation at Bibliothèque Nationale de France-Richelieu	8
Shoshun HAYASHIDERA, On the Use of the Old Japanese Manuscripts Database at the College Library	9
Report on the Open Lectures	10
Schedule, Publications, and Project Members	11

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「東アジア仏教写本研究拠点の形成」ニュースレター

いづく 第6号

平成22年12月1日発行

編集・発行 国際仏教学大学院大学
日本古写経研究所
〒112-0003 東京都文京区春日2-8-9
URL <http://www.icabs.ac.jp>
E-mail nihonkoshakyo@icabs.ac.jp

印刷 株式会社 高山

Newsletter of the Strategic Research Project for Private Universities Granted by the Ministry of Education of Japan
'Establishment of the Research Centre for East Asian Buddhist Manuscripts'

ITOKURA Vol.VI

Published by Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies
2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0003, Japan
© Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies 2010
Printed in Japan at Takayama Co. Ltd., Tokyo